

Press Release

【報道関係者各位】

2017年12月

エミール・ガレ 自然の蒐集

ガレの海・関連イベント

さかなクン1日館長&トークイベント

フランスのガラス工芸作家エミール・ガレが、植物や昆虫など森の生き物だけでなく、クラゲやタツノオトシゴなど海の生き物たちも作品のモチーフにしたことは、あまり知られていません。さかなクンが1日館長をつとめ、ガレがモチーフとした海の生き物たちの生態を紹介いただくトークイベントを行います。

日時:2018年3月24日(土)

講師:さかなクン(東京海洋大学・名誉博士／客員准教授)

場所:ポーラ美術館

参加方法:後日HPにてお知らせいたします。



ガレの森・関連イベント

小田康平氏トークイベント「植物が人を虜にする理由」

植物を愛したガレは、自邸の庭で約3,000種もの植物を育て、それらをガラス作品のモチーフに取り入れていました。本展では、こうしたガレの植物の蒐集家としての側面に注目し、植物屋「叢 - Qusamura(くさむら)」の店主である小田康平氏を招いてトークイベントを開催します。国内外を旅して集めた個性あふれる植物を、その個体の特徴を引き出す器とあわせて提案する小田氏に、ご自身の活動や、植物を集める魅力についてお話しいたします。

日時:2018年5月5日(土)14:00 - 15:30

講師:小田康平氏(「叢 - Qusamura(くさむら)」店主)

場所:ポーラ美術館

参加方法:後日HPにてお知らせいたします。



「ガレ・ウィーク」

開催期間:2018年5月3日(木)ー5月6日(日)

GWはご家族で楽しめるイベントを多数開催いたします。

トークイベント、小中学生向けワークシート、周辺の自然を全身で体感できる遊歩道散策ツアー、体験型ワークショップなど、開催中の「エミール・ガレ」展をより深く楽しんでもいただける期間といたします。また、期間中は、小中学生は無料でご入館いただけます。

【報道に関するお問合せ】

ポーラ美術館広報事務局

ブラップジャパン 担当:屋木、名取

TEL:03-4570-3172／FAX:03-4580-9155

MAIL:polamuseum.pr@prap.co.jp

住所:〒107-6033 東京都港区赤坂1-12-32

アーク森ビル33F 私書箱562号

ポーラ美術館 広報担当:中西、平澤

TEL:0460-84-2111／FAX:0460-84-3108

MAIL:pr@polamuseum.or.jp

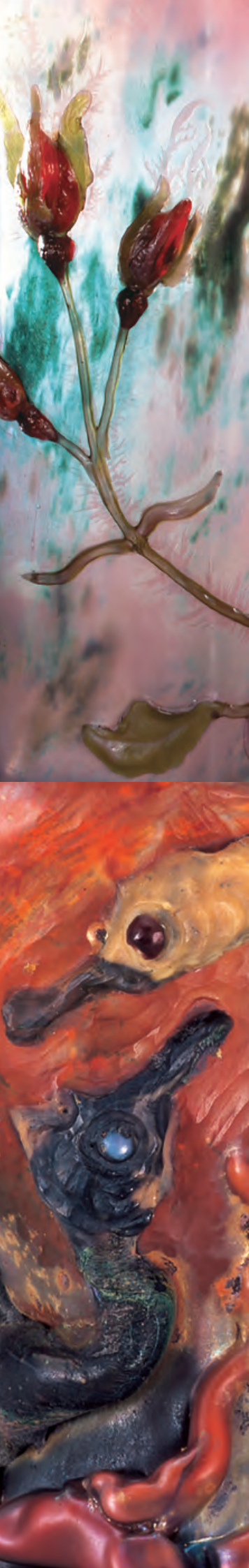
住所:〒250-0631

神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285

2018.3.17土ー7.16月

会期中無休 開館時間:午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

ポーラ美術館
POLA MUSEUM OF ART



概要

ガレが魅せられた 「神秘の森」「驚異の海」

ポーラ美術館では、開館以来初となるエミール・ガレ(1846-1904)の展覧会を開催いたします。フランス語で「新しい芸術」を意味する「アール・ヌーヴォー」が流行したのは、19世紀末のことです。自然の有機的な形態を着想源とした曲線をふんだんに用いたこの芸術様式において、ガレはガラス工芸の分野で第一人者として活躍しました。植物学や生物学をはじめとする博物学的な知識と卓越した技術を駆使して、傑出した芸術作品を次々と生み出したガレ。自然界に存在するさまざまなかたちを見つめ、植物や昆虫、動物、そして海の生物といった数多くのモチーフを意匠化したガレの芸術制作は、自然を蒐集するコレクターになぞらえることができるでしょう。とりわけ植物の研究に取り組んだガレは、植物や昆虫のすみかである「森」を生命の象徴として捉えていました。また、19世紀後半は海洋学が進展した時代であり、「海」の生態についての関心が一層高まりを見せます。「森」と「海」というふたつの主題は、ガレが晩年に傾倒した象徴主義の文学や芸術にも深く関わっていました。本展では、初期から晩年までのガレの優品を辿りながら、芸術家の創造の源泉であった「自然」を、「森」と「海」というふたつの視点から紹介します。

会 期： 2018年3月17日(土)～7月16日(月)(会期中無休)
開館時間： 9:00～17:00(最終入館は16:30)
主 催： 公益財団法人ポーラ美術振興財団 ポーラ美術館
特別協力： 東京大学総合研究博物館

■入館料

	個人	団体(15名以上)
大人	1,800円	1,500円
シニア割引(65歳以上)	1,600円	1,500円
大学・高校生	1,300円	1,100円
中学・小学生	700円	500円

※ 料金はいずれも消費税込み。
※ 中・小学生の入館については、土曜日は無料です。
※ 中・小学生が授業の一環として観覧する場合、中・小学生および引率教員等の入館は無料です。

上：《花器「フランスの薔薇」》1900年頃 飛騨高山美術館蔵 / 下：《花瓶「海馬」》1901～1903年 北澤美術館蔵

表紙図版(上から)：《くらげ文大杯》1898～1900年 サントリー美術館蔵(菊地コレクション) ©TAKESHI FUJIMORI / 《ハッタ文花器》1878年頃 サントリー美術館蔵 / 《ケシ文花器》1900年頃 ポーラ美術館蔵 / 《アザミ文花器》1884年頃 ポーラ美術館蔵 / 《花瓶「海馬」》1901～1903年 北澤美術館蔵 / 《菊花文花器》1900年頃 ポーラ美術館蔵 / 《花器「フランスの薔薇」》1900年頃 飛騨高山美術館蔵 / 《クニダリア文花器》1904～1905年 ヤマザキマザック美術館蔵 / 《蜻蛉文脚付杯》1904年頃 ヤマザキマザック美術館蔵 / 《水差「ギアナの森」》1903年頃 個人蔵

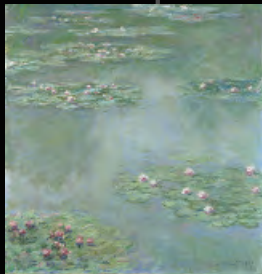


みどころ

01 国内のガレ・コレクション130点を展示！
モネの絵画も堪能できる！

アール・ヌーヴォーを代表するフランスの工芸作家エミール・ガレ。「ナンシーに日本人として生まれた」とも評されたガレは、日本でも人気が高く、日本には世界に誇るガレ・コレクションを有する美術館が数多く存在します。北澤美術館、サントリー美術館をはじめ、飛騨高山美術館、ヤマザキマザック美術館、ウッドワン美術館などから約70点を借用し、ポーラ美術館のコレクションから厳選した60点のガレ作品とあわせて、およそ130点を展示します。さらにモネやルドン等の絵画と併せて展示し、分野を超えて隆盛した芸術運動や時代背景もご紹介します。

クロード・モネ《睡蓮》1907年 ポーラ美術館蔵 / 《花瓶「悲しみの睡蓮」》1890年頃 飛騨高山美術館蔵



みどころ

02 『海底二万里』が書かれた時代！
芸術家たちの好奇心を刺激した「海」をご紹介します！

ガレは晩年、海をテーマにした重厚感の溢れる作品を多く製作しました。この時代、『海底二万里』（ジュール・ヴェルヌ著、1870年）の世界的ベストセラーにみられるように、海底探検船やダーウィンの進化論によって海洋学や海洋生物学が大きく進展し、海への関心が高まりました。ガレもまた、新しい芸術のモチーフとして海の生き物に関心を寄せ、また神秘的な生命の源として海に深い憧憬を抱き、アール・ヌーヴォーの特徴である曲線美とも呼応するユニークな海洋生物の姿をモチーフに取り入れ、仄暗い海底を思わせる重く鈍い色のガラス地に重ねました。ガレが晩年に傾倒した象徴主義の内面世界の表現を、自然の生命力を取り込むアール・ヌーヴォーの有機的な造形に託し、ガラス工芸の芸術性を高めた過程をご紹介します。

上：《貝の付いた壺》1903年頃 ポーラ美術館蔵 / 下：《クラゲ文花瓶》1900～1904年 北澤美術館蔵



みどころ

03 ガラスでできた博物図鑑！博物館のようにモチーフを楽しむ展示の工夫、イベントが盛りだくさん！

植物学や生物学に精通していたガレは、さまざまな自然のモチーフを精緻に写し取り、自らの芸術に取り入れました。こうした自然のモチーフを体系的に分類するとガレが編んだ博物図鑑が浮かび上がることでしょう。本展では、自然界に存在するあらゆるものを蒐集し分類する学問である博物学の観点から、ガレの作品を楽しむ展示の趣向やイベントをご用意します。東京大学総合研究博物館所蔵の標本資料の展示や、さかなクン(東京海洋大学・名誉博士 / 客員准教授)や、国内外を旅して集めた植物の美しさを提案する植物屋「叢 - Qusamura(くさむら)」の店主である小田康平氏のトークイベントを通じて、普段の「美術館」とは一味違った体験をご提供します。

《菊花文花器》1900年頃 ポーラ美術館蔵





エミール・ガレ／Emile Gallé

ガラス工場の執務室にて 1899－1900年頃
RMN-GP / Droits réservés / AMF / amanaimages

あらゆる学問に精通し、優れた経営者でもあったアーティスト、エミール・ガレ

1846年、フランス北東部のナンシー生まれ。ガラスと陶器を扱う商社を経営する父のもと、早くからガラス製作の技術を学びます。1894年にはナンシーにガラス工場を新設して事業を拡大し、デザインから製作までの一貫生産を始めました。1878年のパリ万国博覧会で、陶器とガラス部門で銅賞を受賞。1889年のパリ万博ではガラス部門でグランプリを、そして陶器、家具部門でも金賞、銀賞を受賞するなど、多彩な才能を発揮して、1900年万博において不朽の名声を確立します。ガレは、植物学や生物学のほか、文学や哲学など多岐にわたる学問への深い造詣を、ガラスの造型や意匠にいかんなく発揮し、芸術性の高いガラス作品を生み出しました。1904年、ナンシーにて歿。

ガレとアール・ヌーヴォー

「アール・ヌーヴォー」(Art Nouveau)とは、フランス語で「新しい芸術」という意味で、19世紀後半に生まれ、世紀末に花開いた国際的な芸術様式です。自然の有機的な形態を着想源とした曲線をふんだんに用いたこの芸術様式において、ガラス工芸の分野で頭角を現したのがガレでした。ガレは伝統的な工芸の意匠から脱却し、いち早く自然をモチーフとしたデザインを取り入れるとともに、ガラス工芸の第一人者として認められ、その地位を不動のものとなりました。



《水差「トンボ」》1874-1889年 飛騨高山美術館蔵

ガレと象徴主義

象徴主義とは、19世紀末に展開された芸術運動のひとつで、暗示的な表現を多く用い、人間の内面的な苦悩や夢想を表現するものです。ガレはガラス工芸の分野で象徴主義の先駆をなした人物でした。従来の透明ガラスの装飾から離れ、さまざまな技法を自ら開発して、不透明な重く鈍い色彩のガラス作品を数多く手がけました。また、図案と共に詩文を刻んだ「もの言うガラス」と呼ばれるシリーズにも取り組んでいます。

《海藻文花器》1900-1904年 ヤマザキマザック美術館蔵



第1章 初期－エナメル彩の魅力

ガレは30代でガラス工芸作家として活躍はじめます。父が興したガラス工場で製造していたのが、エナメル彩と呼ばれる伝統的なデザインの商品でした。初期時代のガレのひとつの到達点とも言えるのが、1878年の万博で好評を得た「月光色ガラス」という技法です。自らが開発し特許を取得したこの技法とエナメル彩を用いた作品によって、ガレは一躍有名になりました。

《バット文花器》1878年頃 サントリー美術館蔵



「月光色ガラス」を素地とし「エナメル彩」で彩色した作品。万博ではイスラム文化圏や中国、日本など、さまざまな地域の文物が紹介されましたが、この作品に描かれたバットと植物には、日本美術の影響がみられます。エナメル彩とは、色ガラスの粉末を油や松脂で練った顔料を用い、絵付け・彩色した後、焼き付けて定着させる技法です。

第2章 神秘の森

ガレは工房の扉に「わが根源は、森の奥にあり」という言葉を彫り掲げていました。植物学に精通していたガレは、ナンシー園芸中央協会の要職を歴任しました。ガレにとって、植物の繁茂する「森」は、インスピレーションの源としてだけではなく、生命の神秘の象徴として欠かせないものでした。本章では森の住人たちである植物や昆虫をモチーフとした作品を取り上げ、その意義を探ります。

《ケシ文花器》1900年頃 ポーラ美術館蔵



ケシの実の形になぞらえて制作された作品。白地に暗紅色を重ねた色ガラスの薄片で作った花びらが、はらはらと舞い落ちるように表現されており、植物の生の営みが暗示されています。

第3章 驚異の海

ガレが関心を寄せたもう一つの自然が「海」です。ガレは、クラゲやヒトデ、タツノオトシゴなど、美術ではあまり採り上げられてこなかったモチーフに着目し、時にはグロテスクにさえ見える海洋生物をデザインとして取り入れていきます。生物学や海洋学の進歩により明らかになった海の生物たちのユニークな姿に触発されたガレが、生命の源である海に対して深い憧憬を抱いていた様子を検証します。

《クニダリア文花器》1904-1905年 ヤマザキマザック美術館蔵



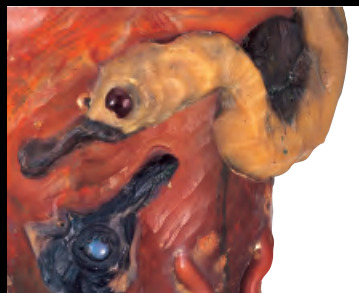
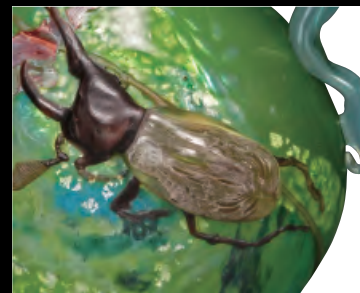
クニダリアとは、クラゲやイソギンチャク等、毒液を注入する針を持つ生物の総称であり、アール・ヌーヴォー期に流行した曲線的なデザインを生み出す上での格好のモチーフとして流行しました。

第4章 晩年－象徴主義を超えて

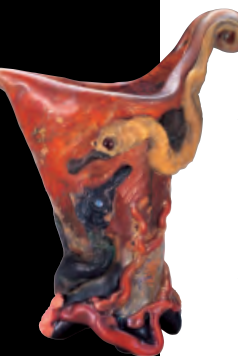
万国博覧会での受賞を重ねて、アール・ヌーヴォーの旗手としての存在感を示したガレ。1900年の万博で再びグランプリを獲得すると、盛り上げの技法を駆使した「装飾の立体化」に力を尽くすとともに、象徴主義の傾向を色濃く打ち出しました。本章では1900年以降に製作された、ガレ芸術の到達点をご紹介します。



世界最大のカブトムシであるヘラクレスオオカブトムシが、溶着されています。この技法はアブリカシオンと呼ばれ、ガラスの塊を部分的に溶着する技法で、立体的な表現に適しています。カブトムシの脚や角などの細部にいたるまで、繊細に技巧を凝らした作例です。



上：《水差「ギアナの森」》1903年頃 個人蔵 / 下：《花瓶「海馬」》1901-1903年 北澤美術館蔵



海馬(タツノオトシゴ)や珊瑚のモチーフが豪快な技法で浮き彫りにされています。これらのモチーフが、地による海の表現と渾然一体となることで、目に見えないものを表そうとする象徴主義の世界観を鑑賞者に強く喚起させます。

ガレの海「生命の根源」

アール・ヌーヴォーと海のモチーフ

ガレはアール・ヌーヴォーを特徴付ける「曲線美」を表現するために、当時さまざまな関心を引き起こした海洋生物の有機的で複雑な形態をデザインに取り込みました。生物学者エルンスト・ヘッケルの著した『自然の芸術形態』（1899-1904年）には、クラゲやヒトデなどの驚異的ともいえる姿が精緻な図版によって紹介されています。「海の秘密を、勇敢なる海洋学者は解き明かしてくれます。」とガレが述べたように、この時代の芸術や建築に多大な影響を与えた「海のモチーフ」を、ヘッケルによる美しい図版を交えながらご紹介します。



潮の流れにまかせて揺れ動く海藻の中を、群をなしたクラゲが漂う様子が表現されています。笠の丸みや、長い曲線を描く触手など、クラゲの姿はまさにアール・ヌーヴォーのスタイルを体現しており、深い青の地色や輝くようなオレンジ色のプラチナ箔と相まって、神秘的な海の世界を象徴する作品となっています。

《くらげ文大杯》1898-1900年 サントリ美術館蔵（菊地コレクション）
©TAKESHI FUJIMORI

ガレの森「生命の循環」

植物への愛が高じて、研究者に？ 国際学会で発表するガレ

植物を愛したガレ。その深い愛情は、ナンシーの自宅に庭師を雇い、3,000種にも及ぶ植物を集めた広大な庭園作りに注がれました。さらに植物の研究も手がけ、20年間にもおよぶ故郷でのフィールドワークを通じて、野生のランの研究に打ち込み、その成果を1900年のパリ万国博覧会の国際植物会議で発表しました。



森の住人であるトンボは、ガレにとっては生命の儚さを象徴する昆虫でした。ガレは、1902年に白血病が悪化し、1904年に58歳で亡くなりますが、その直前に、トンボをモチーフとした器を近しい友人や親族に贈っていたと言われています。

《蜻蛉文脚付杯》1904年頃 ヤマザキマザック美術館蔵

もの言うガラス—象徴主義の文学とガラス

人間よ、何人もお前の心の深さを測りえなかった。海よ、何人もお前の奥底の富を知ることは出来ない—シャルル・ボードレー

波間にゆらめく海藻とその間を泳ぐ海馬（タツノオトシゴ）が彫刻され、詩人ボードレーの詩が刻まれています。この海についての詩をガレはとりわけ愛好していました。器に銘文が刻まれたガレの作品は「もの言うガラス」と呼ばれており、この作品では言葉とイメージが響き合うことによって、象徴的な意味合いが一層高められています。イメージと言葉を合わせることは、1880年代後半にガレが深く傾倒した象徴主義の理念にかなったものでした。



《海藻と海馬文花器》1905年頃 ポーラ美術館蔵



エルンスト・ヘッケル『自然の芸術形態』（1899-1904年）
ポーラ美術館蔵

ガレ・エピソード

クモヒトデを育てたい！ 現地の海水の輸送を懇願するガレ

海の生き物の中で、ガレの心を魅了したもののひとつが、クモヒトデでした。《小物入れ「ルファンのタコ」》の底部にはタコの図案が刻まれています。側面にデザインされているのはクモヒトデの腕です。細長い腕を持つこの動物に愛着を抱いていたガレは、自宅での飼育を試みます。当時、ブルターニュ地方のカルナックに滞在していた従兄弟のシャルル・ケレルがガレに宛てた手紙には、ガレの依頼にしたがい生きたままのクモヒトデと20リットルの海水を、約800キロ離れたナンシーに住むガレに送ったという内容が記されています。



《小物入れ「ルファンのタコ」》1898年頃 Darvish Gallery Collection



図版（左から）：《風景文花器》1874-1889年 / 《貝と水草文栓付瓶》1889年頃 / 《草花文水差し》1884年頃 / 《菊にカマキリ文花器》1880年代 / 《菊にカマキリ文花器》1884-1904年 / 《ヘチマ文脚付花器》1884-1889年 / 《ヤグルマギク文水差し》1879-1882年 / 《アザミ文花器》1884年頃 / 《ケマン草文花器》1895年頃 / 《蜻蛉文香水瓶》1878-1890年頃 / 《貝の付いた壺》1903年頃 / 《海藻と海馬文花器》1905年頃 / 《海藻文脚付杯》1903-1905年 / 《ユリ文花器》1895-1897年 全てポーラ美術館蔵